

## 高校教科書「日本史」のうちの古代史編の目次要点

### 【読後感】

1. 東京書籍『日本史探究』も、2. 山川出版社『高校日本史』もともに、大和政権(ヤマト王権)の成立を「この地に巨大な古墳がある」ことをその理由としている。  
しかし、前方後円墳の中でも特に巨大な古墳があるのは、大阪河内地方と岡山吉備地方であるから、決定的な根拠とはならないと思われる。  
前方後円墳の全国的な分散配置や銅鐸の近畿以東での巨大化といった現象がなぜ起こったのかに、九州王朝説との関係を解く鍵があるように感じる。

### 1. 東京書籍『日本史探究』 2024.2.10 発行

著作者: 渡辺晃宏・山本博文(ほか17名)

全体目次(全336頁): **第1編(先史・古代の日本と東アジア)** ←対象とする編

第2編(中世の日本と世界) 第3編(近世の日本と世界) 第4編(近現代の地域・日本と世界)

### 第1編((先史・古代の日本と東アジア)の目次 (7~64頁)

第1章(先史社会の生活と文化) 8~17頁

1. 旧石器時代の日本
2. 縄文文化
3. 弥生文化と小国家の形成

第2章(歴史資料と先史・古代の展望) 18~23頁

1. 先史・古代の歴史を組み立てる資料の特質
2. 東アジアとの交流のなかでうかびあがる歴史
3. 木簡が語る律令国家の実態

第3章(古代社会の形成と展開) 24~49頁

1節 律令国家の形成と古代文化の展開

1. 大和王権と古墳文化
2. 飛鳥の朝廷と文化
3. 律令国家の形成と白鳳文化
4. 平城京と天平文化

**2節 摂関政治と貴族文化 50~64頁** ←対象外

- 1. 平安遷都と唐風文化**
- 2. 貴族社会と摂関政治**
- 3. 国風文化**

### 第1章(先史社会の生活と文化)の内容

1. 旧石器時代の日本 8~10頁

人類の出現: ※主要用語として、**道具、言葉、打製石器、旧石器時代。**

日本列島の旧石器時代: ※主要用語として、**更新世、氷河時代。 岩宿の発見**

2. 縄文文化 10~13頁

縄文文化の発生: ※主要用語として、**完新世、磨製石器、竪穴住居、縄文土器・文化・時代。**

縄文時代の生活: ※主要用語として、**貝塚、縄文時代の交易圏。**

縄文時代の信仰/縄文文化の特質: ※主要用語として、**アニミズム、土偶、抜歯、屈葬。**

**歯から縄文人の人生を探る**

日本人の起源: 現在につながる基本的な特徴は縄文時代に形成された。そして、弥生時代から古墳時代に渡来してきた多くの人々と混血しながら、さらに、生活環境の変化にも影響を受けて、その後の日本列島に住む人々が形成されたと考えられている。 **「歴史を探る」 縄文人の生活を探る—三内丸山遺跡**

3. 弥生文化と小国家の形成 14~17頁

弥生文化の成立: 紀元前3世紀には、中国では秦・(前)漢という強力な統一国家が成立し、その過程で大陸では大きな変動があった。その余波は日本列島の農耕社会の成立にも影響をおよぼしたとみられる。

※主要用語として、**水稻耕作と金属器、弥生土器・文化・時代。 水稻耕作文化の始まり**

稲と鉄：九州北部に始まった水稲耕作は西日本から東日本に伝わり、北海道と南西諸島を除く各地に広まった。中期末から後期になると**鉄器**が普及し、農耕が容易になった。中期以降に普及した銅鐸などの**青銅器**は、おもに祭祀の道具として用いた。稲作が始まると、穀物をたくわえる**高床倉庫**もつくられた。

### 青銅器の分布と銅剣・銅矛 荒神谷遺跡から出土した多量の銅剣

戦争と国の始まり：※主要用語として、集落の**首長・環濠・高地性集落**。

九州北部の特定の甕棺墓からは、大陸性の銅鏡や銅剣・銅矛など、おびただしい副葬品が発見されるので、首長のなかには、大陸と交渉する者があらわれたことが知られる。中国の歴史書では、このような首長を「王」、その支配領域を「国」と記している。 **復元された吉野ヶ里遺跡**

小国の分立と大陸との関係：『漢書』地理志によれば、紀元前1世紀ごろ、**倭人**は百余国に分かれ、楽浪郡へ定期的に使いを送っていたという。ついで、『後漢書』東夷伝では、紀元57年に**倭の奴の国王**が、後漢の光武帝に使者を送り、印綬を受けたという。これらの記録によると、九州北部を中心とする西日本の地域に小国が分立し、中国と交渉をもっていた。そして、**2世紀後半ごろ**、倭の小国のあいだで争いがはげしくなった、と伝えている。 **金印は何を語るか 『漢書』地理志・『後漢書』東夷伝・『魏志』倭人伝の関連部分記述**

邪馬台国：※主要用語として、『魏志』倭人伝、**卑弥呼**、**邪馬台国**。邪馬台国の所在地については、近畿地方とする説と北九州地方とする説があり、長い論争がくりひろげられてきた。**最近では**、大型建物跡や大溝が見つかった奈良県桜井市の纏向遺跡の発掘成果や、漢の鏡の出土分布などから、**大和盆地南東部がその候補地として有力になりつつあるが**、いまだ確実な証拠が得られているわけではない。

## 第2章(歴史資料と先史・古代の展望)の内容

### 1. 先史・古代の歴史を組み立てる資料の特質 18～19頁

歴史を組み立てる素材：文書、歴史書、絵画、工芸品、建築、考古遺物、伝承、祭り、景観、等。

年代を決める手がかり：文字資料のある時代ならば、一緒に出土する文字資料に書かれた年代が重要な手がかりになるが、それ以前の資料の実年代の決定には、放射線炭素 C14を用いた年代測定法など、自然科学の力を借りる必要がある。

年代決定と時代区分：縄文時代の始まりにしても、弥生時代の始まりにしても、年代測定という科学技術の問題であるとともに、何をもって時代を分ける指標とするのかという、歴史のとらえ方の問題でもあることである。年代をより正確に特定できても、移行期の理解しだいで時代の区切りは変化するのである。

### 縄文時代から現代までの気温の変化(図)

### 2. 東アジアとの交流のなかでうかびあがる歴史 20～21頁

倭国の歴史と中国の歴史書：日本最古の文字資料は、志賀島出土の「漢委奴国王」の金印である。その後、中国の歴史書の記述や、七支刀、稲荷山古墳の鉄剣などの金石文はあるものの、まとまったものとしては7世紀半ばに出現し、後半に事例が増加する木簡、そして8世紀前半の記紀をまたなければならない。

海外史料の限界：倭国の地理や国内情勢に関する記述はで伝聞にもとづく情報であるため、曖昧な部分が残る。**たとえば、『三国志』魏志倭人伝倭人条(『魏志』倭人伝)の邪馬台国への行程に関する記述をそのままたどると、九州のはるか南方に位置することになってしまう**。そこで、(略)連続説や放射説が出された。前者は畿内説に、後者は九州説に有利だが、両説を前提とした解釈であることも否めない**(※倭人伝冒頭を表示)**。

東アジア世界で歴史を考える：倭の五王による中国南朝(宋など)への朝貢がとだえ、隋が中国を統一すると、倭国は遣隋使を派遣して新しい外交関係の構築をめざした。遣隋使については、『日本書紀』に書かれていない600年の派遣のことや、煬帝の怒りをかった国書のことも『隋書』で知ることができる。双方の記録があって、初めて外交関係の詳細を知ることができるのである。**※邪馬台国の行程図、『隋書』倭国伝の記事**。

### 3. 木簡が語る律令国家の実態 22～23頁

史料としての木簡：記紀は国が一定の歴史観にもとづいて編纂した歴史書で、情報量もかぎられる。そこで大きな役割をはたすようになってきたのが、発掘調査でみつかるとなる木簡、墨書土器、漆紙文書などの出土文字資料である。なかでも木簡は、文書や帳簿など律令国家の実務運営の手段として用いられたため、日本古代の歴史を考えるうえで欠かせない史料となっている。

木簡の比較： 木簡が伝えること：

## 第3章(古代社会の形成と展開)

### 1節 律令国家の形成と古代文化の展開 24～29頁

## 1. 大和王権と古墳文化

東アジアの動き：中国では晋が全国を統一、北朝と南朝に分かれ、朝鮮半島は高句麗、百濟、新羅。日本列島でも小国を統一する動きが進んでいたことが、古墳の出現と各地への広がりなどから知られている。

古墳の出現と大和王権の成立：前方後円墳。各地の前期古墳は墳形や副葬品がほぼ共通し、大和を中心とした近畿地方に特に巨大な古墳が集中していることから、4世紀初めには、古墳をつくった各地の王が、大和地方の王を盟主として政治的連合体を形成していったと考えられる(大和王権・大王)。

大和王権と朝鮮・中国：伽耶地域。高句麗の広開土王碑の碑文によると、大和王権は兵を朝鮮半島に送って戦ったとみられる。また、伽耶の任那と結んで、朝鮮半島南部と密接な関係を持った。大和王権の5代の王(倭の五王)。大和王権は、朝鮮半島へ進出することで大陸の先進的な文化をとり入れ、軍事的にも経済的にも大きな力を持つようになった。

古墳文化の発展：5世紀前半に大阪平野につくられた巨大な菅田山古墳や大仙陵古墳は、大和政権の権力や権威の大きさをよくあらわしている。服装品も馬具や甲冑、金属製装身具などが多くなり、大量の鉄製の武器もおさめられている。※年輪年代法の解説、隅田八幡神社人物画像鏡、須恵器。

大陸文化の摂取と渡来人：主要用語として、渡来人、須恵器、品部、漢字、儒教・仏教。

大和王権の支配のしくみ：大和王権は、5世紀後半のワカタケル大王のころから、地方の豪族に対する支配を強め、中央の政治機構を整備していった。氏上、国造、氏姓制度、伴造、舍人、屯倉。

古墳の変質：5世紀末以降、大陸の墓制の影響を受けて横穴式石室があらわれた。群集墓・横穴墓。6世紀末には、その規模を小さくなって、高い身分や権威を大きさによって示すといった古墳の役割は、次第に失われていった。※大和地方の豪族、吉見百穴、古墳の構造。ワカタケル大王の時代

民俗信仰の展開：6世紀には、自然神や氏神をまつための社(神社)が建てられ始めた。また、太占や盟神探湯などの呪術も行った。また、各地の神話や伝承が宮廷で「帝紀」(大王家の系譜)と旧辞(神話や大和王権の物語)とにまとめられたと考えられる。

## 2. 飛鳥の朝廷と文化 30～33頁

東アジアの変化と大和王権：※主要用語として、高句麗・百濟、新羅、伽耶諸国。朝鮮半島における大和王権の影響力は大きく後退した。※主要用語として、朝廷、物部氏、蘇我氏、飛鳥寺。仏教の興隆につとめた。※6世紀の朝鮮半島地域図、石舞台古墳、天皇家と蘇我氏との関係図。

遣隋使の派遣と国政の改革：※主要用語として、蘇我馬子、推古天皇、厩戸王(聖徳太子)、隋・遣隋使・小野妹子、留学生・学問僧。冠位十二階、憲法十七条。

※七世紀初めの東アジア、飛鳥とその周辺の遺跡、『日本書紀』遣隋使の派遣記事、憲法十七条条文。

飛鳥文化：仏教をあつく信仰する厩戸王が、早くから仏教を受け入れていた蘇我氏とともに政治を行うようになる。都のあった飛鳥地方を中心に、大きな寺院が建てられ、仏教文化がさかえた。飛鳥寺(興法寺)・法隆寺。飛鳥文化を生み出したのは、おもに朝鮮半島諸国からの渡来人の子孫であったが、南北朝時代の中国の影響も受けている。※法隆寺と金堂釈迦三尊像など、中宮寺・広隆寺の仏像など。

## 3. 律令国家の形成と白鳳文化 34～40頁

大化の改新：※主要用語として、蘇我入鹿、唐、中大兄皇子、中臣鎌足、乙巳の変、4条からなる改新の詔、大化の改新、律令国家建設へのさきがけ。※新政府の組織、7～8世紀のアジア、改新の詔条文。

律令国家の形成：※主要用語として、白村江の戦い、即位して天智天皇、庚午年籍、(壬申の乱)、天武天皇、八色の姓、皇后が持統天皇となって改革を引きつぎ、庚午年籍、藤原京に遷都。

※大野城と水城、壬申の乱の進路と主な戦場、藤原京の復元図。

白鳳文化：律令国家の建設が勧められた天武・持統天皇の時代には、宮廷を中心に清新で活気にみちた文化がおこった。これを白鳳文化という。薬師寺など官立の大寺院が建立され、伊勢神宮の地位が高められた。柿本人麻呂や額田王、建築物と仏像など。※薬師寺・金堂薬師三尊像、興福寺仏頭、法隆寺金堂壁画・夢違観音像、高松塚古墳壁画の発見と文化財の保存。

律令国家の統治組織：※主要用語として、藤原不比等、大宝律令が完成、律令制。蔭位の制、太政官のもとで八省が政務を分担。国府・郡家・駅家、国司・郡司。国家的な動乱に対処するために急いで建設された日本に律令国家は、地方の豪族の権威と権力に依存しながら、律令制を実施していった。

※律令官制図、条里制、発掘で明らかになった武蔵国都筑郡家復元模型。

戸籍と班田収授法：※主要用語として、戸籍、計帳。口分田、班田収授法。条里制。

公民の税負担：※主要用語として、租、庸・調、雑徭、衛士・防人、出拳。

**※公民の税負担、防人の歌。 地域の窓「出雲国意宇郡中心部の古代景観。」**

4. 平城京と天平文化 41～49頁

平城京の造営： 主要用語として、**長安、平城京、和同開珎**。①国号「日本」を対外的に使用したのは、栗田真人等が遣唐使として派遣されたときが最初と考えられる。②③ ④飛鳥池遺跡での発見で富本銭が7世紀後半の天武朝にさかのぼる日本最古の銅銭であることがわかった。

地方支配の拡充： 主要用語として、**大宰府、多賀城、蝦夷、隼人**。

土地政策の転換： 主要用語に、**百万町歩開墾計画、三世一身の法、墾田永年私財法、賃租、初期荘園**。初めは現地の管理事務所や倉庫などの建物が建ちならぶ区画を荘といったが、のちに耕地をあわせて荘園(荘)とよんだ。初期荘園では、租を国におさめた。

律令政治の進展： 主要人物として、**藤原不比等、長屋王、橘諸兄、藤原広嗣**。

政治と仏教の結びつき： 主要用語として、**鎮護国家、国分寺と国分尼寺、大仏造立の詔、東大寺・大仏開眼、藤原仲麻呂、道鏡、恵美押勝の乱**、天智天皇の孫の白壁王(光仁天皇)。

遣唐使： 遣隋使につづいて、630年から遣唐使が派遣された。日本はまた、朝鮮半島を統一した新羅や、7世紀末に中国北東部におこった渤海とも、ひんぱんに使節を交換した。

天平文化： 主要用語として、**貴族文化、天平文化、仏教、南都六宗、行基、東大寺法華堂、校倉造の正倉院宝庫、唐招提寺金堂、塑像と乾漆像**。 **※主な建築・美術作品**。

記紀と万葉集： 主な文書などとして、**大学・国学、『古事記』『日本書紀』、『風土記』、『懐風藻』『万葉集』**。「歴史を探る」**奈良時代の貴族と庶民(発見された長屋王の邸宅、奈良時代の日常生活)**。 **貴族の食事と庶民の食事、衣服、火葬と土葬**。課税台帳としての計帳。

## 2. 山川出版社『高校日本史』 2024.3.5 発行

著作者： 佐藤信・五味文彦・高埜利彦・鈴木淳 (ほか21名)

全体目次： 第Ⅰ部(原始・古代)5-58頁 ←対象とする編 第Ⅱ部(中世)59-106頁

第Ⅲ部(近世)107-162頁 第Ⅳ部(近代・現代)163-279頁

### 第Ⅰ部(原始・古代)の目次

#### 第1章(日本文化のあけぼの)6-19頁

1. 日本文化の始まり
2. 農耕の開始

#### 第2章(古墳とヤマト政権)20-28頁

1. 古墳文化の展開
2. 飛鳥の朝廷

#### 第3章(律令国家の形成)29-47頁

1. 律令国家への道
2. 平城京の時代
3. 律令国家の文化
4. 律令国家の変容

#### 第4章(貴族政治の展開) 48-58頁←対象外

1. 摂関政治
2. 国風文化
3. 荘園の発達と武士団の成長

### 第1章(日本文化のあけぼの)の内容

大陸から日本列島に渡ってきた日本人の祖先は、旧石器時代から縄文時代、弥生時代へと移っていくなかで、定住生活や農耕生活を身につけていった。自然環境の変化は、人びとの生活にどのような影響をあたえたのだろうか。

#### 1. 日本文化の始まり

人間の誕生： ※用語として、氷河時代。

旧石器文化： ※用語として、旧石器時代、打製石器。 ※Topicとして、日本の旧石器文化の発見、旧石器と遺跡捏造事件。

縄文文化： ※用語として、弓矢、磨製石器、土器、縄文土器、縄文文化。

縄文人の生活： ※用語として、竪穴住居、貝塚、土偶。

#### 2. 農耕の開始

弥生文化： ※用語として、水稻耕作、弥生文化・時代、青銅器・鉄器、石包丁、弥生土器、続縄文文化、貝塚後期文化。 ※Topicとして、弥生文化の成立年代、銅鐸絵画。

弥生人の生活： ※用語として、竪穴住居、貝塚、土偶。

小国の分立： ※用語として、吉野ヶ里遺跡、環濠・高地性集落、銅鐸・銅矛・銅戈、『漢書』、『後漢書』には、紀元57年に倭の奴国が朝貢し、光武帝から印綬をうけたことが記されている。

邪馬台国連合： 『三国志』の魏志倭人伝によると、倭では2世紀の終わりに大きな争乱がおこり、なかなかおさまらなかった。そこで、諸国の王は共同で邪馬台国の卑弥呼を女王としてたてたところ、ようやく争乱はおさまり、邪馬台国を中心とするおよそ30国の連合体ができた。(略) 邪馬台国の所在地については、九州説と近畿説とがある。九州説をとれば、邪馬台国は九州北部の地域政権にとどまることになり、近畿説をとれば、すでに3世紀前半に、近畿中央部から九州北部までの広い範囲におよぶ政治的連合体ができており、のちのヤマト政権につながることになる。 ※Topicとして、卑弥呼がおこった鬼道とは。

歴史資料と原始・古代の展望① 古代社会と海外との交流： 弥生時代以来、日本列島の倭の小国やヤマト政権・倭国から、中国の皇帝のもとに使者が派遣され、また朝鮮半島諸国との交流もさかんに展開した。そのようすは、中国の歴史書に記されている。また、刀剣の銘文などの出土文字資料や考古学的な発掘調査成果もあわせると、ヤマト政権・倭国から律令国家への歴史的展開をくわしく知ることができる。

中国の歴史書からみてみよう： 『漢書』、『魏志倭人伝』、高句麗広開土王碑、『宋書』倭人伝の倭の五王。

出土史料の銘文からみてみよう： 稲荷山古墳鉄剣、江田船山古墳鉄刀

遺跡・遺物からみてみよう： 筑紫国造磐井の乱、岩戸山古墳

ヤマト政権・倭国や律令国家は、なぜそして何を求めて東アジアとの交流をすすめたのだろうか。仮説をたててみよう。また、中国や朝鮮半島との交流が、ヤマト政権や律令国家の展開に与えた影響にはどのようなものがあったのか、仮説をたててみよう。

**歴史資料と原始・古代の展望②** 木簡から古代国家をさぐる： 古代には、文書をもちいた行政を基本とする律令制のもとで、紙の文書とともに、木の札に墨書した木簡が、情報伝達のために多くもちいられた。都の平城宮跡や長屋王邸宅跡のほか、地方でも大宰府・多賀城などの遺跡から、多数の木簡が出土している。木簡から古代の歴史をみてみよう。

荷札木簡とは何か 各地から平城宮に贈られた荷札木簡

律令国家の中央政府と地方の役所とのあいだでは、何のためにどのような内容の文書や木簡のやりとりがおこなわれたのだろうか、仮説をたててみよう。また、地方においてはどのように漢字文化が広がったのだろうか。文書や木簡の動きに着目して仮説をたててみよう。

## 第2章(古墳とヤマト政権)の内容

ヤマト政権が政治的な連合をつくると、同じ形式の古墳が各地に広まった。ヤマト政権は、朝鮮半島や中国とも関係を保ちながら、大王と※を？中心とした国家形成をめざした。古墳と政権はどのような関係があるのだろうか。大陸とはどのような交渉をもったのであろうか。

### 1. 古墳文化の展開

古墳の出現とヤマト政権： 前期の前方後円墳のなかでも、もっとも古く規模が大きい**箸墓古墳**が奈良県(大和)にみられることから、この地方が政治的連合の中心であると考えられ、これを**ヤマト政権**とよぶ。

古墳文化： 大阪府の大仙(仁徳天皇)陵古墳や関東・瀬戸内・南九州などの地域にも、大規模な前方後円墳がつくられており、これらの地域の有力者(豪族)がヤマト政権のなかで重んじられていたことがわかる。

※主要用語として、**埴輪**、**横穴式石室**、**群集墳**。 ※Topicとして、**五色塚古墳**。

ヤマト政権と東アジア： 中国大陸では、(略)。朝鮮半島では、北部に**高句麗**、南部に**新羅**・**百濟**(略)。倭(日本)では、4世紀のなかごろまでには、大和地方を中心とするヤマト政権が勢力を拡大し、大和地方の王は各地の豪族を統合して**大王**とよばれた。ヤマト政権は新しい文化や鉄資源を求めて、早くから朝鮮半島南部の加耶諸国と深いつながりをもっていたが、(略)**高句麗の広開土王(好太王)碑**には、倭の兵が辛坊の年(391年)以降、朝鮮半島にわたり、高句麗軍と戦ったことが記されている。中国の歴史書によると、5世紀をつうじて倭の5人の王が中国南朝の宋に朝貢の使者をつかわした(**倭の五王**)。埼玉県と熊本県の古墳から発掘された鉄製の刀剣には、ともに「**獲加多支鹵(ワカタケル)大王**」の名がみえる。この大王は、『日本書紀』にみえる**雄略天皇**であり、『宋書』倭人伝の武にあたる。文字史料からみると、大王の支配権は、5世紀後半には九州から関東地方にまでおよんだことが確認できる。

大陸文化の伝来： ヤマト政権が朝鮮半島や中国との交流を深めると、多くの人びとが海をこえて倭に渡ってきた。ヤマト王権は彼らを積極的に受け入れた。これらの人びとを**渡来人**とよんでいる。6世紀には、**儒教**や**仏教**が百濟など朝鮮半島の国々から伝えられた。とくに仏教は、後の時代の日本の文化に大きな影響をあたえることになった。 ※Topicとして、**中国の情勢と倭の外交**。

古墳時代の人びとの生活： **土師器**、**須恵器**。**太占の法**、**盟神探湯**。

ヤマト政権の政治組織と古墳の終末： 6世紀に入るところには、ヤマト政権の組織もとのつてきた。氏姓制度、**臣**・**連**、**伴造**、**田荘**、**部曲**。またヤマト政権は地方支配を強めるため、各地に屯倉とよぶ直轄地や**名代**・**子代**とよばれる直轄地をおき、大王に従属した地方豪族たちを**国造**などの地位に任命して地方の支配を固めた。九州の筑紫国造磐井が新羅と結んで大規模な戦乱をおこしたが(**磐井の乱**)、大王軍はそれを鎮圧し、この地方の支配をいっそうすすめていった。

### 2. 飛鳥の朝廷

東アジア情勢の変化とヤマト政権： 女性の**推古天皇**が即位すると、大臣の**蘇我馬子**や天皇の甥の**聖徳太子(厩戸王)**らが新しい国家体制づくりに取り組み、603年に**冠位十二階**の制度、604年に**憲法十七条**を定めた。607年には**遣隋使**として**小野妹子**がつかわされた。608年の遣隋使には多くの留学生・学問僧を同行させた。彼らは、やがて帰国すると、のちの大化の改新などの国政改革に蔽いに貢献することとなった。

飛鳥文化： 7世紀前半を中心に朝廷のあった飛鳥の地には、大王の王宮を中心に有力豪族や多くの渡来人が住み、大陸・半島との交流をうけてさかんに文化活動を展開した。この時代の文化を**飛鳥文化**とよぶ。

※法興寺や法隆寺(斑鳩寺)関連の仏像などを紹介。

### 第3章(律令国家の形成)

日本は中国の制度を取り入れて律令による国家の枠組みをつくったが、一方で前の時代の国家のあり方をうけついでいる。それはどのようなところにあらわれているのだろうか。また日本的な政治のあり方は、どのようにまれてくるのだろうか。

#### 1. 律令国家への道

大化の改新：中国では(略)。朝鮮半島に(略)。倭では、大臣の蘇我蝦夷とその子入鹿が権勢をふるい、山背大兄王をほろぼして権力を集中しようとしたが、王族中心の中央集権をめざす中大兄皇子や中臣鎌足は、645(大化元年)に蘇我父子をほろぼした。皇極天皇にかわった孝徳天皇のもとで、甥の中大兄皇子は皇太子となり、まず朝廷の人事を一新した。そして、唐から帰国した留学生らの知識を活用して、大化の改新とよばれる一連の政治改革をすすめるようとした。また、都を飛鳥から難波に移し、大規模な難波宮をいとなんだ。ついで翌646(大化2)年正月、4カ条の改新の詔を発したという。そこには、(1)～(4)の実施などが目標にされたという。ただし、詔は当時の文章のままとはいえず、その内容がすぐに実現したわけでもなかった。※Topicとして、天皇号はいつはじまったか。「天皇」という称号は、「大君は神にしませば」とうたわれた天武天皇の時に現人神としてもちいられたとする説がある。一方で推古天皇の時代に外交交渉のなかで「天子」にかわるものとして、考え出されたとの説もある。

壬申の乱：朝鮮半島では、(略)。斉明天皇(皇極天皇重祚)のもとで、倭は抵抗を続ける旧百濟勢力を助けるために大軍を送ったが、663(天智2)年の白村江の戦いで唐・新羅連合軍に大敗した。※天智天皇の業績として、①水城や古代山城を築くなど国防を強化、②都を近江大津に移し、③庚午年籍をつくる、④内政の改革を急いだ。672(天武元)年、天皇の弟大海人皇子は大友皇子を倒して(壬申の乱)、都を飛鳥にもどして即位し(天武天皇)、中央集権国家の形成をすすめた。※業績として、①八色の姓を制定、②歴史書や律令の編纂を始めた。天武天皇が亡くなったあと、皇后の持統天皇が事業を引きつぎ、飛鳥浄御原令を施行して統治のしくみをととのえた。また(略)本格的な都城である藤原京を完成させた。こうして中央集権的な国家体制は、確立していた。※Topicとして、古代宮都の変遷。

律令国家のしくみ：701(大宝元)年、大宝律令が制定された。(略) ※主要用語としては、二官八省、神祇官と太政官、公卿、畿内・七道、国・郡・里、国司・郡司、大宰府、蔭位の制。

民衆の生活：※主要用語は、戸籍、口分田、班田収授法、租・庸・調、雑徭、出挙、衛士、防人。

#### 2. 平城京の時代

遣唐使：日本も唐の文化を積極的に取り入れようとし、8世紀に入るとほぼ20年に1度の割合で遣唐使を派遣した。航路は、8世紀以降新羅との関係が悪化すると、(北路から)東シナ海を横断する南路をとった。

平城京の繁栄：710(和銅3)年に、都が藤原京から平城京に移された(遷都)。この年から長岡京をへて平安京に都が移るまでの約80年間を奈良時代とよぶ。律令国家のしくみは、このじだいにほぼ整備された。※用語として、和同開珎、蝦夷、隼人。

政治・社会の動揺：律令国家の建設に功績をたてた藤原氏は、天皇家に近づいて勢いを強めた。藤原不比等の子どもの4兄弟は、左大臣長屋王を自殺に追い込み(長屋王の変)、不比等の娘の光明子を聖武天皇の皇后にたてることに成功した。※これ以後の出来事・人物・用語として、橘諸兄、玄昉、吉備真備、国分寺建立の詔、大仏造立の詔、藤原仲麻呂、道鏡。称徳天皇が亡くなると、藤原氏などの貴族は道鏡を追放し、あらたに天智天皇の孫の光仁天皇をたて、混乱した政治の再建につとめることになった。

※Topicとして、木簡。平城京跡の長屋王家木簡からは、王家の生活や家政運営、家内で働く人びとの実態などが、明らかになった。

新しい土地政策：※主要な用語などとして、三世一身法、墾田永年私財法、初期荘園。

#### 3. 律令国家の文化

白鳳文化：7世紀後半から8世紀初頭にかけて、天武天皇持統天皇が築いた藤原京を中心に、あらたな傾向の文化が花開いた。天皇の権威が高まり、新しい律令国家を建設しようとする意識に満ちていた時代の文化で、これを白鳳文化という。※主要用語として、薬師寺、柿本人麻呂。

天平時代の文芸と学問：奈良時代に平城京を中心に栄えた文化は、律令国家の繁栄を背景とした、はなやかな貴族文化であった。この文化を、聖武天皇の時代の年号をとって天平文化という。遣唐使がもたらした最盛期の唐文化の影響が強い、国際色豊かな文化である。※主要用語として、『古事記』『日本書紀』、六国史、風土記、『万葉集』。

天平時代の仏教と美術： ※主要用語として、**鎮護国家**、**南都六宗**、**行基**。

※**Topic**として、**正倉院宝物の国際性**。

#### 4. 律令国家の変容

平安遷都： 光仁天皇のあとをうけた桓武天皇は、(略)水陸交通の便利な山背(山城)の地に都を移すことにした。784(延暦3)年に長岡京へ、ついで(略)794(延暦13)年に平安京へ遷都した。

※主要用語として、**健甕**、**勘解由使**、**坂上田村麻呂**、**征夷大將軍**。

律令支配の変容： ※主要用語に、**嵯峨天皇**、**蔵人頭**、**藤原冬嗣**、**檢非違使**、**令外官**、**格・式/三大格式**。

弘仁・貞観文化： 8世紀末から9世紀末頃まで平安京を中心に栄えた文化を、嵯峨天皇と清和天皇の年号から**弘仁・貞観文化**とよぶ。 ※主要用語に、**最澄・空海**、**天台宗・延暦寺**、**密教**、**真言宗・金剛峯寺**、**現世利益・加護祈祷**、**神仏習合**、**一木造**、**曼荼羅**、**三筆**。

**周辺地域を学ぶ①** 古代の南九州—隼人— 『古事記』や『日本書紀』によれば、かつて九州南部にはクマソとよばれる人びとがいて、ヤマト政権に抵抗していたという。やがて7世紀後半になると、現在の鹿児島県にあたる地域に住む人びとを、「隼人」とよぶようになった。また、種子島・屋久島など南島との交流も始まった。(略)